

禅

32号(通巻212号)



赤岳を望む(立田英山写真集『花あいしらず』より)

(注)八ヶ岳の主峰赤岳の山頂には、疎開中に帰寂された
ご長男快川居士の遺骨が埋められています。

現代の若者意識と布教

上岡 白雲

「ボ～～」と、一際大きな汽笛に振り返ってみると、窓に面した海峡に大型フェリーが船体を白く輝かせながらゆっくりと北上している。そばをランチが数隻、波を蹴立てて走り、遠く、近くに漁船が点在する、ここ玄界灘入り口、関門海峡は、活気あふれる朝のラッシュであります。一日に航行する船舶は約600隻、その一割は外国船であり、時には自衛艦、そして鯨の群れをも見ることもある、色どり豊かな海峡であります。

一方、視野を海外に転じますと、リーマン・ショックによる世界同時不況は、ユーロ諸国をも脅かし、ギリシャのように破綻寸前の国家を出すまでに至っています。

これら一連の経済破綻は、先進国・後進国にかかわらず、それぞれの国に多くの社会問題を引き起こし、希望の持てない、そして心の豊かさをも失う、不透明の時代ともなってきました。

このほど発表された日本青少年研究所による、日本・韓国・中国・米国の4カ国の若者を対象とした意識調査（2007年）を見ますと、日本の若者の意識と他の3カ国の若者のそれには、かなり大きな隔たりを感じます。

高度成長を遂げた日本は、衣食住に困らない、豊かな国にはなりましたが、これにより若者の意識も人生観も変わってきております。

人生の目標について、特に日本の若者は、暮らしていける収入さえあれば、「のんびりと」、「平凡に」、「平穩に」を望む者が圧倒的に多く、

最少の米国の13%に対し43%とダントツとなっており、ひと頃のがむしゃらな「向上心」や「勇気」・「冒険心」・「智慧」などは、もはや過去のものとなったようであります。

日本の若者が特に敬遠するのは、医師や経営者、また責任あるリーダー職であり、何よりも「平凡で」、「楽しく」が今は一番といわれております。

大学も、受験生と学校数が従来と逆転しつつあり、あまり頑張らなくても、なんとか大学に入れるような時代ともなりました。

また、今までは生涯の就職先と考えていた一流企業も、将来の安泰は期待できず、豊かな時代の彼らにとっては、一流大学も大企業も、あこが憧れの対象ではなくなってきたように見えます。

最近は、「何故、勉強しなくてはならないのか？」とさえ考える者も増えたともいわれますが、これはすべての基本に関わる問題なので、考えさせられるところであります。

しかし、このような平穏な時代が、いつまで続くかは分かりませんので、若者達たちの今後のあり方が問われるところとなります。

「頑張らなくてよい」、「骨を折らなくてよい」、「人の世話にはならない、また世話もしたくない」ということが、時代の趨勢すうせいとなったとき、次の将来に若者達が必ず直面するであろう様々な問題と、物の豊かさが行き詰ったときの「心の崩壊」はまた厳しく、今の比ではないようにも思われます。

このように刹那的せつなに豊かさを甘受する若者とは別に、現在の日本社会は難しい問題を多く抱えて、呻吟しんげんしています。

中でも、昨年の自殺者は10年連続して3万人を超えるという、悲しい出来事があります。せっかく生を受けながら、必ずしも健康上の理由ではない人々が、自らの命を縮めるということは、まことに残念な

ことであり、原因や理由はそれぞれ違うようですが、そのほとんどは「心の問題」に帰するように思えます。

このような事柄に力を尽くし、解決を図っていくのが、宗教の主な役割であると考えるとき、布教・救済の遅々たるを感じずにはおられません。

後世に名を成した哲学者、イマヌエル・カントは、子供の時から病弱であり、特に持病の喘息は、人生の希望さえ失うほどの激しいものであったそうです。その貧しい村に、時折巡回してくる若い医師の「君は体は病んでいるかもしれないが、心は少しも病んでいない。」という一言で彼は心機一転し、以後自分と同じ苦しみを持つ人々に、自分の考えを伝え 救っていったとありますが、いま少し踏み込んで「真実の自己」たる「仏性」(注1)を究めておれば、哲学の域を超えて、更に多くの人々の「本当の救済」に繋がったものと惜しい気がいたします。

敬虔なクリスチャンの方々の日常を拝見しておりますと、主キリストを心から崇拜し、「布教即信仰」と純真に伝道される姿はまことに美しく、敬意を覚えるものがあり、宗派を超えて学ぶものがあります。

釈尊も「我、最後の一人をも度せずんば止めじ」(注2)の誓願を立てられ、不惜身命の布教をされましたが、望外の仏縁を頂き、法恩に浴する者としまして、「この世に生を受けた本当の喜び」を一人でも多くの若者に伝え、「正しく・楽しく・仲良く」を実践し、「世界楽土の建設」を推進することの必要を強く感じています。

今日も海峡は、無心に悠久な流れを見せ、宇宙の息づかいを伝えております。

豊かに見える若者も、私達が若かったときと同じように、真剣に

道を求めていることには変わりはありません。それをどう引き出し、どのように導いていくかが、人生の先輩としての役割であり、課題ではないかと考えるところであります。

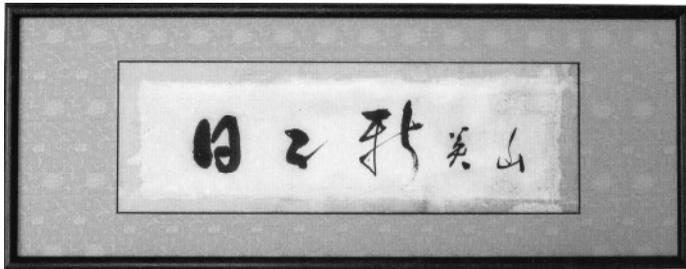
編集部注

今回、「宗教の窓」を「日々に新たなり」に改めました。人間禅（人間形成のための禅の意。）では、正しく・楽しく・仲の良い世界楽土づくりを目指して、数息観を主要な柱とする合掌運動を展開しており、この運動にふさわしい呼称として選定させていただきました。

『大学』に【^{まこと}洵に日に新たに、日々に新たに、又日に新たなり。】という詞句がございます。人間形成に終わりはないということでもあります。また時々新たに、刻々に新たに、共に人間形成を深めてまいりたいものでございます。

（注1）仏性：大自然の生命が人間に宿ったものをいう。

（注2）度：渡すの意。迷いの此岸から悟りの彼岸に渡し救うこと。



日々に新 英山(昭和40年)

著者プロフィール



上岡白雲（本名 / 満）

昭和9年、広島県生まれ。（株）朝日工芸社代表取締役会長。昭和35年、人間禅立田英山老師に入門。現在、人間禅師家分上。庵号 / 妙頂庵。